



世界のトップ・アーティストたちの注目の公演 vol.1

MUSE CONCERTS PICK UP

《秃山の一夜》《チャイコン》《革命》 東響プレミアムが驚きの¥4500

口

シヤ五人組の中で、最も破格の才能を発揮したのがムソルグスキー。あまりの独創性ゆえに生前一度も演奏される機会がなく、ラヴェルの編曲によってようやく陽の目を見た『展覧会の絵』をはじめ、一度聴くと耳から離れない強烈な個性をもつ作品を数々生み出した。

交響詩『秃山の一夜』も、そんなムソルグスキーの天才性を強く印象づける1曲。「ヨハネ祭の前日の夜に悪魔が戯れる」という題材そのものがユニークだが、音楽はそれに輪をかけて強烈。あまりに粗野な楽想ゆえに、友人のリムスキー＝コルサコフはムソルグスキーの死後、楽譜を改訂し洗練された響き書き直し、偉大な友の才能をなんとかか世に知らしめようとした。

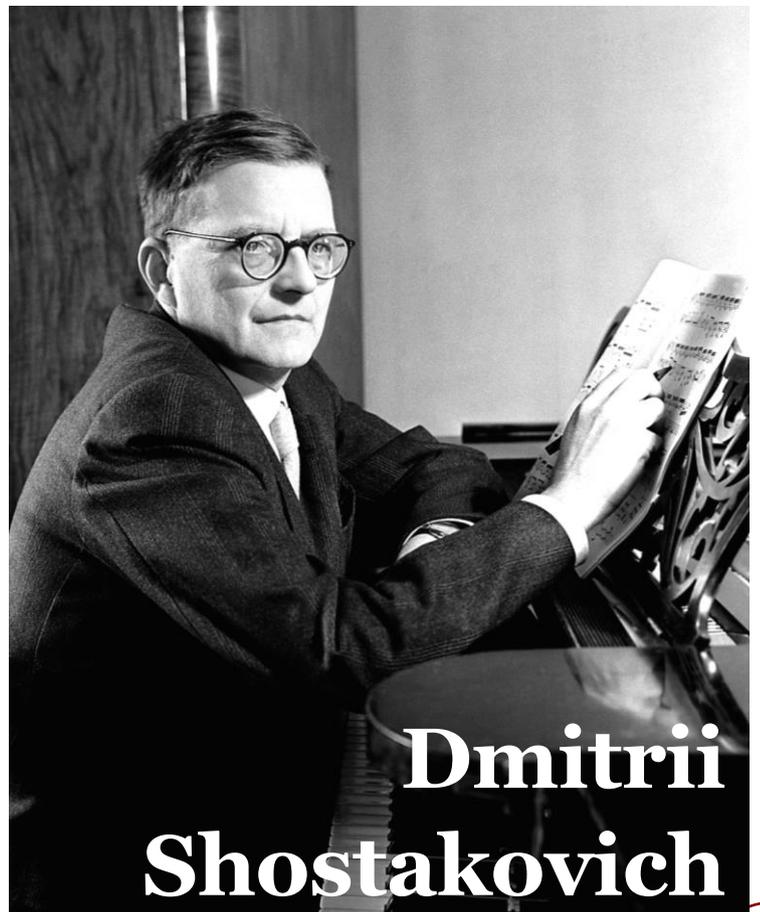
ヨ

ヨーロッパの音楽語法を十分に消化したチャイコフスキーは、上品な響きと豊かな民族性のバランスが完璧。ヴァイオリン・コンチェルト（通称チャイコン）は、ブームス派の評論家ハンスリックには「悪臭を放つ音楽」とこき下ろされたが、結局は世界で最も優れた協奏曲に数えられる人気作品になった。長年のお付き合いの“恋人”であるヴァイオリン奏者コテック君と共に、入念に仕上げただけあり、鮮やかな演奏技巧などヴァイオリンの魅力が心憎いまでに凝縮されている。

シ

ショスタコーヴィチの交響曲第5番、通称「革命」は、ムソルグスキーやチャイコフスキーほど生易しい音楽ではない。スターリンによる恐怖政治の中、ショスタコーヴィチのオペラが槍玉にあがり、その作風が共産党の機関紙「プラウダ」で糾弾され、シベリア送り＝大粛清の危機にさらされてしまう。友人や協力者が去り、絶望と死の淵に立たされた作曲家が再起を求めて世に問うたのが、交響曲第5番「革命」なのである。第4楽章の勇壮な行進曲やファンファーレが、スターリンへの迎合なのか、あるいは独裁者への痛烈な皮肉なのか、現在でも議論は尽きないが、音楽史上最も緊迫感に満ちた、同時にとてつもない生命力を宿したシンフォニーであることは疑う余地がない。

裏につづく



Dmitrii
Shostakovich



世界のトップ・アーティストたちの注目の公演 vol.2

MUSE CONCERTS PICK UP

ヨーロッパを席捲する才能が集結！

11年前の感動ふたたび！神尾真由子のチャイコフスキー！

アンドレイ・フェーヘルを知る音楽ファンは日本にはまだ少ないだろう。それもそのはず、2011年に指揮者の道を歩みだしたばかりの気鋭の存在で、日本への登場回数はまだごくわずかだ。しかしその“気鋭ぶり”と欧州・カナダでの躍進がなかなか凄い！わずか22歳でカナダのケベック響の最年少アシスタント・コンダクターに就任すると、卓越した音楽性とバトンテクニックが評価され、何とフランス最高峰パリ管弦楽団のアシスタント・コンダクターに招かれ、音楽監督であるパーヴォ・ヤルヴィと活動を共にする。パリ管を相手にチャイコフスキー、プロコフィエフ、R.シュトラウスなどで絶賛を博すと、一流オケから次々オファーが殺到。2016年シーズンには、モントリオール響、モンテカルロ・フィル、ローザンヌ室内管と次々に共演し大成功をおさめた。そしてまさに今年2018年、わずか26歳にしてカナダのキッチナー・ウォータールー響の音楽監督に就任したのである。現在の拠点はカナダだが、東欧ルーマニア出身のフェーヘルは、ロシア音楽に並々ならぬ情熱を燃やしており、今回、所沢ミューズと東京交響楽団から、なかなかハードなロシア・プログラムのおファーを受け取ると「作品を熟知しており、完璧にやり遂げる！」と自信を漲らせた！



初登場のフェーヘルに対し、ヴァイオリンの神尾真由子については、もう何の説明もいらないだろう。2007年にチャイコフスキー・コンクールで優勝すると、無伴奏リサイタル、デュオ・リサイタル、協奏曲で何度となく所沢ミューズに登場し、圧倒的なテクニックと表現力で聴衆を魅

了してきた。2016年、体調不良で所沢ミューズのニューイヤー・コンサートをキャンセルした故・中村絃子さんの代役を二つ返事で快く引き受けてくれたもの彼女だった。

そんな神尾真由子だが、世界の注目を浴び飛躍のきっかけとなったチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲は、いまだ所沢ミューズでは披露していない。2007年の興奮さながらに、成長を続ける稀代のヴァイオリニストが紡ぐ世界最高峰のチャイコフスキーをお楽しみいただこう！

